

会員の広場



明治日本、民間外交の草分け達

松下 滋（東京）

いま、国家間の問題は、政府や外交専門家同士の対応だけではとても収まらない。交通通信網が発達しただけでなく情報化が加速、人々の隔々にまで知識が行き渡るようになった結果、世論の持つ力が著しく拡大した。世論が、国家間の対立を煽ったり、融和を促し

たりする。令和日本、外交・経済に及ぼす世論の影響は大きい。民間外交の出番である。明治の先人を例示すれば、

洪沢栄一（実業家） 1909年

渡米実業団 米国各界と交流

米国世論は、日露戦争後、新興勢力日本に脅威を感じるようになる。開国以来の友好関係が一転、対立関係に。小村外相からの要請として、民間外交に乗り出す。69歳（明治42年）の時、総勢51人を引き連れ、8月から12月にかけて、53都市を訪問。ロックフェラー宅、タフト大統領、エジソン、ハーバードはじめ主要大学、教会、福祉施設などを訪ね、反日感情を和らげる民間外交を展開した。加

州における排日土地法、排日移民法の成立は阻止できなかったが、81歳まで船旅で足を運び、日米の友好回復に尽した。

三島弥太郎（知識人） 1888年

マサチューセッツ農科大学 問題提起

父は薩摩藩士三島通庸。札幌農学校クラーク博士ゆかりのマサチューセッツ農科大学卒業試験で最高位の成績。グリーンネル金牌を受けて行った卒業演説のタイトルは「日本に公正を」。「開国日本は、治外法権を外国に与え、関税賦課権を放棄させられてしまった。正義は何処に行ってしまったのか」。地元紙は「愛国心溢れる演説、状況を鮮やかに解明明快で説得力ある英語力」と全文を掲載した（不平等条約の解消は23年後）。国益のために、

記録に残るオビニオンを発信した。横浜正金銀行頭取、日銀総裁を歴任。現職のまま世界した唯一の総裁。

三島弥彦（アスリート） 1912年

五輪初参加 スポーツ国際化

弥太郎の弟でマラソンの金栗四三と共に、ストックホルムでの第五回五輪に参加した。100m・200m走とも予選落ち。400m走準決勝は怪我で棄権。100m予選、トップの米国選手10秒5分の3に対し、11秒5分の4。成績は振るわなかったが、走り高跳びのバー、槍投げの槍、円盤投げの円盤を持ち帰り、順位だけを競っていたトラック競技を、記録重視の「レース」に近代化。わが国スポーツ国際化の道を切り開いた。